

神奈川県立こども医療センターオレンジクラブ



ボランティアニュース

209号 2021年3月号

発行 神奈川県立こども医療センター オレンジクラブ事務局

編集責任者 ボランティアコーディネーター 加藤 悦典

〒232-8555 横浜市南区六ツ川 2-138-4 Tel. 045-711-2351 (代表)

ホームページ <https://orangeclub.kcmvolunteer.com>

ブログ <https://blog.kcmvolunteer.com>

病院のスタッフとして、患者様一人ひとりへの対応を心掛けています

総合案内 山藤敦子

こども医療センターの正面玄関に立たせていただくようになり、一年半が過ぎました。多くの患者様が来院され、患者様は毎日変わります。そして様々なご家族の姿があります。生後数週間の赤ちゃんの様子、バギーで同じ姿で寝ている双子さん。何て可愛らしいことでしょう。でもその中で、“おはようございます。いってらっしゃい。いつも声かけてくれてありがとうございます。元気が出ます。”入り口は寒いけど頑張ってください。”患者様から二通のお手紙を頂戴しました。



当たり前だと思っていた挨拶が、結び付けてくれたご縁だと感じました。いつも近くにいる兄や姉の様にアドバイスを下される外来ボランティアさん。感謝の言葉しかありません。こころが穏やかになるピアノの演奏、自然と笑顔になる季節飾り。アイデア満載の折り紙の数々。皆さん生き活きとされ、とても素敵です。私は、医師や看護師の様に直接治療をすることはできません。しかし、病院のスタッフとして、患者様一人ひとりへの対応を心掛け、貢献出来たらと考えています。

「つるし飾り」でこども医療センターにも春が・・・



笑顔の瞬間をたくさん作りたい！

～キミだけのオリジナルステッカーを作ろう！～

スマイリングホスピタルジャパン 松本恵里

トンネルには必ず出口があると思いつつも、これほど長く閉塞感が続くとは誰もが想定していなかったと思います。今年に入ってさらに変異株の出現とさらなる猛威を受け、活動の新しいあり方を模索しながら実行しているボランティアも多いと思います。

私たち SHJ は、一番大切にしていることとして～子どもと一緒に作る参加型のアート～にこだわり続けてきましたが、それが叶わないもどかしさを募らせつつ、塗り絵や紙芝居作りのセット、そして観ながら一緒に体を動かしたり身の回りにあるもので工作ができるようなアーティストによる動画の配信を行ってきました。

そして、他にもやりたい！楽しい！と思えるようなものはないかと考えたのが「キミだけのオリジナルステッカーを作ろう！」というアクティビティです。子どもはシールが大好き。自分の絵がステッカーになったらどれほどワクワクするだろうと考え、完成までの工程に子ども自身が主体的に活動できるような仕組みを取り入れ、出来上がりはラミネート加工で 20 枚セットにしました。

- 1 丸と四角のどちらか好きな形を選ぶ
- 2 フォーマットに自由に絵を描く
- 3 出来上がりを楽しみに待つ
- 4 好きなところに貼って楽しむ



神奈川県立こども医療センターでは、加藤ボランティアコーディネーターが各病棟に提案の上フォーマットを配布、出来上がった絵を回収し SHJ 事務所へ郵送していただきました。

ステッカー業者はゼネラルステッカーという会社で、設立当初から団体のロゴステッカーやシールを依頼しているところです。今回はコロナ禍で活動ができないなかでのステッカープレゼント企画に賛同し、パッケージや保護用の台紙をサービスしてくれました。子どもが丸か四角を選べるようにしたい・・・

その理由として、「選ぶ」という行為が主体的な活動への導入として欠かせないこと、特に不自由を強いられる立場にいる子どもにとって「選ぶ」こと自体が主体的な活動となり、さらに自由に制作することを通してオリジナル感の喜びと自分で選んで作った！という自信に繋がることと伝え、「これは SHJ の理念の一つなんですよ」と加えると、「闘病中の子どもがどれほど我慢を強いられているのかがわかった」と共感をいただきました。

到着した絵はどれも感性豊かで、子どもから感動をもらったのはいつものこと。丸と四角のフォーマットには青色の内線と赤色の外線があり、青色の内側に絵を描くよう子どもたちに伝えてほしい、とのことでしたので「はみ出さないように描いてね！」と注意書きを添えてはみたものの、描き始めは枠を気にしつつも夢中になるにつれ絵は枠を飛び出していったのでしょうか。はみ出した元気な絵を見てのびのびと自由に作業した様子が伺えて嬉しくなりました。そしていざ、はみ出し満載の絵を業者に送ったところ、

「誰もが巨匠ですね！はみ出した絵を切り取ってしまうなんて勿体無い。このまま生かせるように頑張ります！」という感想が返ってきました。はみ出したことに文句を言うわけでも、切り取りますがご了承くださいでもありません。現場を知らない方からの温かな寄り添いを実感し、大きな励みになりました。

ステッカー屋さん・・・普段は入院中の子どもとの接点はありません。しかし電話の向こう、メールのやりとりの先にいる人が相手の背景に思いを巡らせその奥にいる人たちに共感し、どうしたらその人たちを happy にできるだろう、という想像力を駆使する姿勢は相手を敬い、自分の仕事に誇りを持つことだと感じます。

病院にいる子どもたちに、「自分で描いた絵やデザインをステッカーにして届けたい」

というひらめきをきっかけに、子どもののびのびした絵を通して思いも寄らない共感を得ることができた素敵な出来事でした。

笑顔の瞬間をたくさん作りたい！

キミだけのオリジナルステッカーを作ろう！

これからも続けていきます。



参加したお子さんからのメッセージ

- *私の絵を、すてきなステッカーにしてくださりありがとうございます！自分だけでなく、家族や祖父母などにも渡そうかと考えています。入院生活の中で、うれしかったことがまた一つ増えました！
- *シールをつくっていただきありがとうございます。
- *ステッカーありがとう！ 他



今月号では、きょうだいお預かりグループの方3名に投稿いただきました。

きょうだいお預かりのボランティアに入って

伊都 香苗

今から13年前、当時、生後半年の息子は、こども医療センターに緊急入院し、心臓の手術を受けました。入院は、2ヶ月と短期間でしたが、主治医の先生を始め、手術や外科の先生方、病棟の看護師さん、病院の相談窓口の方、外来ボランティアさん等、色々な方に支えて頂いて、本当に感謝しています。息子の命を助けて頂いた恩返しが少しでも出来ればと思い、きょうだいお預かりボランティアに入りました。入院当時、姉の娘は2歳で、幼いなりに、家族の事をよく理解し我慢してくれていたもので、きょうだいお預かりをしていると、きょうだい児の我慢する様子が見えた時、切なくなります。しかし、きょうだい児が、預けられているのを忘れてしまうくらい楽しめていたり、入院中のごきょうだいの退院が決まったりすると、とても嬉しいです。

ボランティアさんの中には、本当に子供好きな方や、無償ボランティア活動への意識が高い方が多く、また、きょうだいお預かりに来られる親御さんは、入院中のお子さんにも、そのごきょうだいにも気にかけて、元気にしておられている方が多く、いつも感心し、見習わなくてはいけないなと思っています。コロナウィルスの感染が広がる中、きょうだいお預かりは中止していて、自宅でクリスマスカードの作製等をしました。しばらくきょうだいお預かりが開始出来ない為、どのような活動が出来るか？まだ模索中です。日頃から医療従事してくださっている先生方や看護師さん、子供達のサポートをしてくださっている保育士さんに、心から感謝したいと思います。

ボランティア活動の再開を心待ちにしています。

森岡 考子

2019年10月、私はオレンジクラブのオリエンテーション参加の為に初めてこども医療センターを訪れました。館内の至る所に色とりどりの飾りがされていたことが印象に残っています。まさか、その4ヵ月後にボランティア活動が自粛されるとは、夢にも思いませんでした。

このようなこともあり、まだ不慣れな私がボランティアニュースに投稿していいのか悩みましたが、家族の後押しもあり、思い切って今の気持ちを率直に書いてみる事にしました。

活動を決めたきっかけは、勤め先のクリニックで騒いでいる乳幼児を連れてきたお母さまが大変そうにされている姿を何度も目の当たりにしていたからです。何らかの形でサポートできないかと思い、自分の子育てが一段落着いたタイミングでオレンジクラブに入会しました。お預かりするお子さまは、ほとんどが0歳～未就園児でしたので、かなり久しぶりで少し緊張しました。実際にお世話すると、みんな可愛らしくて、私の方が元気をもらえました。今では楽しい思い出です。あれから1年経って、お世話したお子さま達も大きくなっただろうなあ、ステイホームでないかないかなあど気になったりしています。

未だコロナの終息の目処はたちませんが、今自分にできる感染予防をして、ボランティア活動の再開を心待ちにしています。

また、最後になりましたが、私達の為に日々敢闘されている医療従事者の皆さまに深く感謝申し上げます。



想いをはせる:きょうだいお預かりの活動を振り返って

鶴田真紀

コロナ禍によりきょうだいお預かりが活動中止となり、約1年が経過した。この間私は、ごきょうだいはどうしているのだろうか、保護者の方はさぞ大変な想いをされているのではないかと、ひたすら想いをはせる日々であったように思う。それは同時に、これまでの私自身の活動を振り返ることであり、きょうだいお預かりの活動を通していかに私が大きな気づきを得ていたかを実感させられた。以下、印象深い2つの出来事を紹介させて頂きたく思う。

1つめの出来事。定期的に活動をしていると、ごきょうだいの「成長」を実感できる時がある。この日も生後3ヶ月ごろからお預かりしていたごきょうだいが、1歳間近になり「人見知りをしなくなったね」とその「成長」をボランティア同士で喜びあっていた時、一緒に活動していたボランティアの方が一言(いや、二言)。「私たちはお預かりする子の成長が見られて嬉しいけれど、それはきょうだい児がずっと入院しているということなのよね。本当は(お預かりをするごきょうだいの)姿を見ることができないのが良いことなのよね」と。たしかに。活動をしている中で感じられる喜びは、ご家族のしんどい想いの継続とひと続きでもある。ごきょうだいの成長は喜びつつも、それと表裏一体のものとしてあるご家族の想いも忘れてはならないと気づかされた出来事であった。

2つめの出来事。きょうだいお預かりの場所を通りかかった Dr.が、ごきょうだいに声をかけてくれたことがあった。そのごきょうだいの弟さんの担当 Dr.だそう。ごきょうだいをお迎えにいらした保護者の方に、その時のことをお話すると、「えー先生は〇〇(お預かりしているごきょうだいのお名前)の顔も覚えていてくれてるんだ！」ととても感激している様子。あの時の保護者の方のパッと花が咲いたような笑顔が、私にはちょっと忘れられない。Dr.の(おそらくは何気ない)声かけが、保護者の方をたちまち笑顔にってしまったように、きょうだいお預かりは、ごきょうだいを単に「預かる」＝「面倒を見る」のではないのだと気づかされた。ごきょうだいであるあなたを、保護者であるあなたを、そして病気と向き合っているあなたを、活動を通して「私たちは気にかけているし、想っているのだ」ということを伝え、実践している場なのだろうと思う。そしてそのためのごきょうだいのための「居場所」なのだと思う。

今日もきょうだいお預かりは、それに関わるすべての人々のさまざまな想いと共に、活動している。忙しさの中でその想いに鈍感にならぬよう、これからも活動と向き合っていきたい。そして、先の文章のように、1日も早く「今日も」と言える日が来ることを待ち望んでいる。



ぼぼんたトピック④

きくちゃん

2月のある日曜日。夜のピアノコンサートに夫と一緒に出席した。勿論、感染対策はしっかりして。昨年の暮れから、入院、手術、通院と行く場所は病院ばかりの夫だが、久しぶりのコンサートホールは暖かい包み込まれるような雰囲気です。私も同じ気持ち。

今は自粛時なので、ホールは人数制限しているらしく、観客は100人以下だろう。でも、ぼぼんたの仲間の顔がちらほら見えて、懐かしいような嬉しい気分になった。でも、おしゃべりはしない！このコンサートはぼぼんたの仲間Kさんが主宰している

‘バンングラデシュ 支援チャリティーコンサート’で79回目になるそうだ。

今回は私も何回か聴かせて頂いているピアニストで、演奏とトーク、2時間はあっという間に過ぎてしまった。プログラムはバッハ、ベートーヴェン、ヘンデル、ブラームス等々、後半はショパンずくめ優しいワルツ 力強い民族曲で気分は高揚してなぜか涙でてしまった。Kさん 素敵な時間をありがとう。